

平成19年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

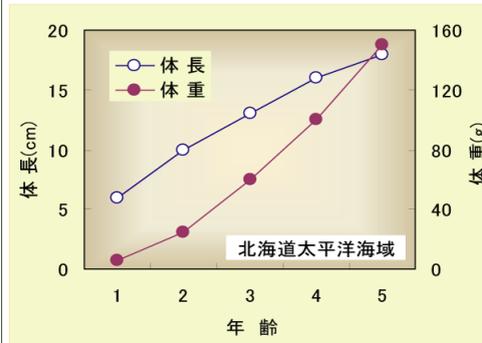
系群名 道東・道南

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 不明
 成熟開始年齢: 3歳
 産卵期・産卵場: 春季(3~5月)、産卵場は恵山海丘、襟裳岬沖、釧路沖、落石沖の山状の地形の周辺(水深400~850m)
 索餌期・索餌場: 北海道太平洋側沖合の一带に分布し、主な分布水深は300~900m
 食性: クモヒトデ類、ヨコエビ類、オキアミ類、エビ・カニ類、多毛類、魚類など
 捕食者: マダラ、アブラガレイ、共食い

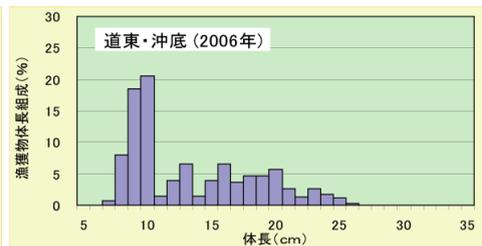
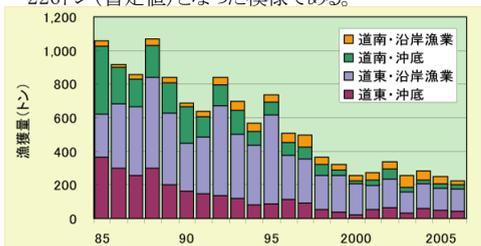


漁業の特徴

沖合底びき網(沖底)の他、えびこぎ網(旧エビ桁網)や刺し網などの沿岸漁業により周年漁獲されている。近年の漁獲量は、沖底よりも沿岸漁業の方が多い。また、道南よりも道東で漁獲量が多い。

漁獲の動向

道東と道南における沖底と沿岸漁業の漁獲量は、長期的には減少傾向にある。1985年まで1,000トンを超えていた漁獲量は、1997年に500トンを超えなくなり、1999年以降は300トン前後にまで減少した。2006年の漁獲量は、過去最低の226トン(暫定値)となった模様である。

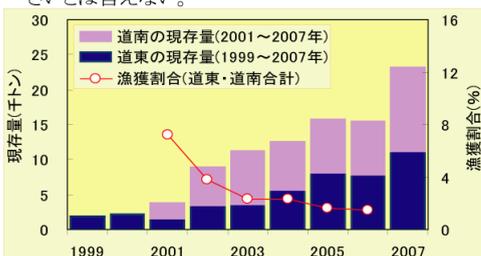


資源評価法

漁獲物の主体となるサイズの年齢と体長の関係が不明であり、年齢別漁獲尾数の算出が困難であることから、コホート解析はできない。したがって漁獲量の経年変化と漁獲物体長組成を資源評価に用いた。また、1999年以降はキチジを対象としたトロールによる現存量調査を実施しており、近年の資源量の指標値としてこの結果も用いた。

資源状態

各海域の漁業種類別の漁獲データがそろった1986年以降の過去21年間(1986~2006年)の漁獲量から、現在の資源水準は低位と判断された。また、2003年以降5年間の現存量推定値の変化から、資源動向は増加傾向と判断された。一方、全体の現存量に対する漁獲割合は減少傾向を示し、2001年は7.2%であったが、2006年は1.5%となった。漁獲割合は低い値となっているが、漁場となっていない水域の現存量が含まれていることや、キチジの成長が遅く、毎年の生産量が小さいことを考慮すると、資源に対する漁業の影響が小さいとは言えない。



管理方策

漁獲量と現存量推定値の変化および漁獲物の体長組成から資源状態を判断し、漁獲量に適切な係数を乗じた値をABCとする。調査結果から2008年の現存量は23,782トンと推定され、2006年に対する資源の増加率は1.53である。資源状態が低位水準にあることから、資源回復を目標とした場合、漁獲圧を下げる必要がある。したがって係数は、増加率に0.8をかけた値とし、これを平均漁獲量に乗じてABClimitを算出した。資源動向は増加傾向だが、現在の資源が極めて低い水準であることに変わりはない。未成魚が成熟するまで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効に働くと期待される。したがって今後とり得る方策としては、漁獲努力量削減はもちろんであるが、加えて漁獲物のサイズ制限や、生育場・産卵場の保全措置も必要と考えられる。

	2008年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	276トン	1.22C2006	—	—
ABCtarget	221トン	0.8・1.22C2006	—	—

資源評価のまとめ

- 現在の資源状態は極めて低い水準にある
- 近年、資源は増加傾向にある
- 漁獲割合は低いが、資源に対する漁業の影響が小さいとは言えない

管理方策のまとめ

- 漁獲努力量の削減が必要
- 未成魚が成熟するまで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効に働くと期待される
- キチジの餌生物が生息可能な海底環境の保全・復元を図ることが、資源回復にとって不可欠

資源評価は毎年更新されます。